

日本史における重要な融合文化の実例
Significant Examples of the Cultural Fusions
in the Japanese History

高野 衛東

TAKANNO Eito

Abstract: When I was an university student in Australia, I learnt about the Japanese economic fusions from the Western cultures, mainly in the modern period, in my history courses. At that time few of the reference materials revealed its cultural and political fusions from the so-called third world - China and Korea. These fusions from the neighboring countries have laid down the psychological and habitual background for the later modern fusions in the aspects of rather rational cultures. In this paper I have found some facts and figures to demonstrate that the Japanese are traditionally very flexible and active in engaging the fusion process.

外国の先進的な文化と技術を吸収して自国の文化と融合するなら、国は強くなり国民も安定かつ質の良い生活を送れると思う。日本人は古代から近代まで、近くにおける東アジア文化圏の諸国の文化を積極的に融合した。外来文化を融合する習慣を身につけた日本人はその後西洋文化も精一杯融合したため、日本はアジア諸国において比較的が一番速く発展してきた。現在、G7(世界先進国は七つがある)の一国であり世界中の人々は驚いていた。欧米人には日本人がアジアの特別な民族として扱っている人は少なくないのである。たくさんの人々はこの成功の秘訣を探しつつありさまざまな論説は溢れている。私も「融合文化研究」という観点から、歴史の資料を利用してこの秘訣を探究した。この論文はもし、その世界の人々に注目されているなぞに対す独特な解説になり得れば幸せだと思う。

日本人は文化・技術を融合する速さと謙虚さで有名でありこの行動は原始社会からすでに始まったと思う。多少参考になれる史料によって日本の歴史は紀元前 4~3 世紀からである。¹⁾ その時には中国はちょうど「戦国時代」が始まった。次の引用には古代の日本列島における原住民は、如何に中国と朝鮮半島の文化を融合するかという光景が示される。

「戦国時代の中国山^{さん}西^{せい}省^{しょう}の一諸侯であった箕子^{きし}が朝鮮北西部に侵出、<箕子朝鮮>という最古の朝鮮王朝を建てた。当時すでに朝鮮は農耕社会になっていたといわれている。その波が、海を越えて日本にも押し寄せたのである・・・。水稲耕作が渡来した紀元前 300 年頃の日本は、縄文期の再末期であった。すでにイモやアワの栽培は行われていたが、基本的には狩猟や漁撈を中心とした自然物採集の時代である。・・・稲作を基本とした弥生文化は、倭人(日本人の古名)が自分の力で切り開いたというよりは、南朝鮮を中心とした渡来人の力が大きいと考えられる。それは各地で発見・発掘された水田の遺構が如実に示している(例えば、福岡県^{いたづけ}板付遺跡)。それはおそらく水稲技術とともに青銅器・鉄器・素焼無文土器・

まがたま^{まがたま}・磨製石鏃^{せきぞく}などを持って、ある程度の数と集団がどっと流入してきたからだろうと思われる。彼らは土着の縄文人とまじり混血を重ね、新しい弥生人を作り出していったのである。」²⁾

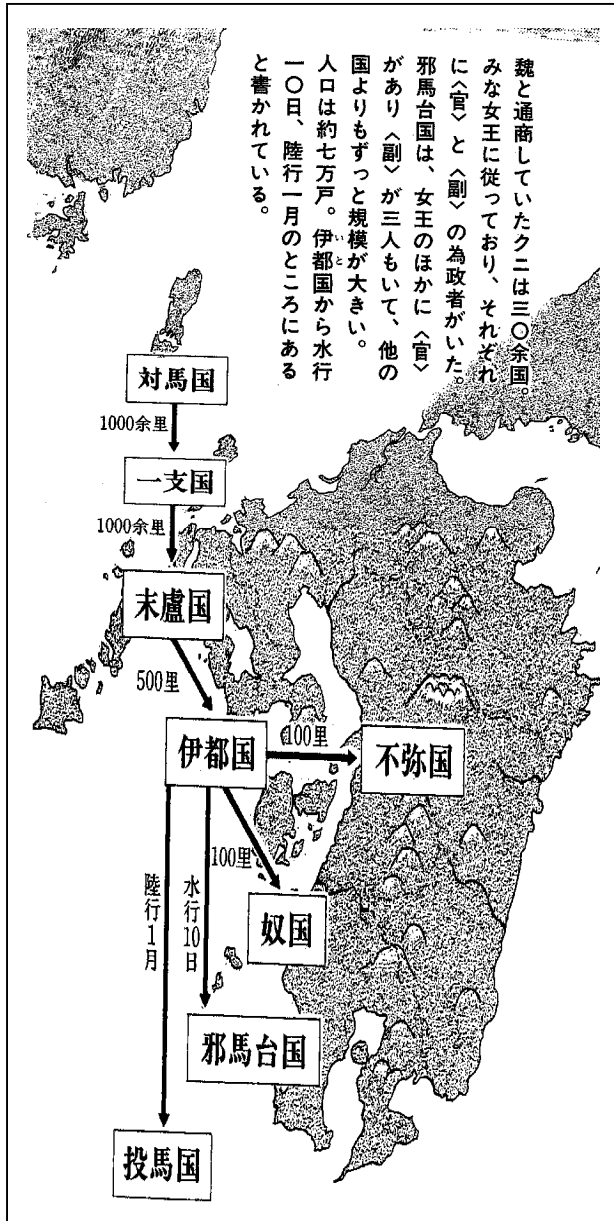
そして農産品の裕福に伴って、王国すなわちクニ(ムラムラ<共同体>とその神々を統べる存在であった原始自治体のこと)は、出現し王国の間に農耕地と水源のために戦いが広がった。当時の人々は紛争の勝利のカギが「海の向こうからやってきたものに石よりも硬い

くろがね^{くろがね}鉄^{てつ}で刀や槍の作り方を教えてもらうこと」というのを信じていた。³⁾「紀元前 2~1 世紀、そういうクニは百以上もあったと『前漢書』地理志は伝えている。」⁴⁾「日本最古の王墓とされた福岡県高木遺跡を始め、多くの遺跡から、副葬品として朝鮮・漢製の鏡や銅剣・銅矛が発掘されている。おそらく、朝鮮、中国と交流し得る力の強大さを跨示した品々なのであろう。それは、中国・朝鮮の文物の輸入が、王権の威光を高めるのに不可欠だからである。」⁵⁾この段落にある資料により重要な物づくりにおける技術の導入と吸収は、日本の歴史を変えた要素であるかもしれない。

この時期の社会変化がよく纏められたのは次の引用にある。「弥生文化が渡来人とともに古代中国文明の洗礼を受けた朝鮮半島から伝えられ、それが行き詰まった縄文狩猟社会を弥生農耕社会に変える契機となったことを見た。このように国際的作用は、民衆の生活基盤を根底から改造する力さえ発揮したのである。大和王権や律令国家の形式も、こうした

国際的作用がなければ、あれほど急速には起こり得なかつたろう。」⁶⁾

紀元前1世紀から紀元9世紀までに日本人は巨大な交通困難を乗り越え、中国の統治者に朝貢を続けた。朝貢で国交ができ、当時における中国の高度な文明との接触もできた。例えば『魏志』倭人伝によると、2世紀半ばから3世紀前半(中国は3国鼎立時代)の時に



「倭国乱れ、相攻伐すること暦年、

すなわ 乃ち、共に一女子を立てて王とな

す。名づけて卑弥呼という。」⁷⁾ 景

初2年(西暦239年)6月、卑弥呼は

大夫難升米等を遣わし郡に詣り、

朝貢の働きをつけたようだ。「魏(中

国3国の中の一国)と通商していた

クニは30余国があり、みな女王(卑

弥呼)に従っており・・・」⁸⁾

卑弥呼が大夫難升米等を派遣した

様子は次の引用に窺え、左にある図

様は当時の地理環境を示す。「西暦

240年(魏暦正始元年)卑弥呼が派遣

した使節、難升米と都市牛利は、滞

方郡(現在の朝鮮半島中西部、魏の属

地)の太守 弓 遵 と魏の建中校尉

梯 儁らを伴って帰国した。卑弥呼

の朝貢に対する魏の明帝からの返礼は、卑弥呼を<<親魏倭王>>とし、金印紫綬を与えるという破格のものであった。この王号と金印は、卑弥呼の三十力国の統合を、東アジア的世界の中で正式に認めると言う意味であり、女王卑弥呼は名実ともに倭国

の王となったのだ。」⁹⁾

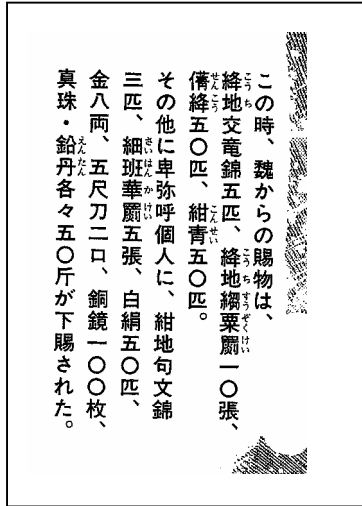
10) 魏の「賜物」は脚注 10)を参照してください。

ちょっと注意すべきなのは賜物の中の織物と衣服の材料のことである。こういうものは弥生人の衣生活の改善に大きな影響を与えたと思う。「弥生時代に発達した衣服の形は中国の当時の形に習って作られたものを着ていたかも知れない。」¹¹⁾ さらに石ノ森章太郎によると「弥生時代の文化は、南中国から渡来した南方形の稲作に代表される農耕文化である。この文化は、始め北九州の一地方に伝えられ、海路によって中国地方から近畿地方へ広がって行ったとされている。」¹²⁾ この渡来人たちは中国

建築の古い伝統(中心軸に対して左右対称を原則とする)を日本人に伝えたというせつもある。この「中心軸」という建築配置は「正面に一棟の中心建築(正殿)があって、その前には庭があり、さらにその周囲を他の建築が取り囲む。この形式は日本においても宮殿、官庁建築、内裏、寝殿造などで広く確認されている。」¹³⁾

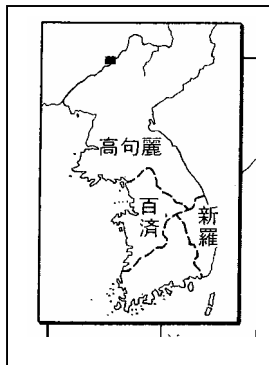
小結論として 弥生人が積極的に渡来人の文化を融合したり大陸との外交を推進したりしたので衣・食・住文化は急速に発展できた。彼らの衣服はその後の日本の着物の祖形となっている。そして、当時建物は現在までも残っていて皇居、お寺などは例になれるであろう。

卑弥呼以後、大和王権が形成されるまで 3 世紀後半から 5 世紀末にかけては謎に満ちた時代である。この時代についての同時代の基本文字史料は、「扱い方の難しい『古事記』、『日本書紀』を除くと、七支刀銘文(西暦 369 年)、高句麗好太王碑文(414 年)、稻荷山古墳鉄銘文(471 年)などと、『宋書』倭国伝(488 年)程度しかない。¹⁴⁾ 『宋書』によると、「西暦二十年代から七十年代にかけて、倭の五王達がたびたび宋に朝貢を行い、倭全体を支配し、朝鮮南部の支配をも実現しようとするに至った。」¹⁵⁾ という。つまり古代の日本は中国との国交を伝統として絶えらなかったし、そして朝鮮半島との文化・技術の交流はますます増えたようである。例えば、「五王後の大和王権の 6 世紀半頃、現在の岡山県北部の美作に^{みまさか}鉄資源が発見された。それで日本の砂鉄精錬の歴史は始まった。その前、北九州の勢力を通じて、朝鮮・中国の鉄鉱石や鉄素材(鉄錠)が輸入されたという。」¹⁶⁾ 「その時の倭国は朝



く だ ら し ら ぎ こ う く り
 鮮半島にある百濟・新羅・高句麗などの諸国家と通交し又戦った事実がある。」¹⁷⁾

学問・思想も弥生文化後期から隣国朝鮮半島諸国と中国から伝えてきたという。『日本書紀』によれば、欽明15年(554年)2月に、倭国からの要請で百濟から五経博士・易博士・
 きんめい えき
 医博士・採薬師・楽人らと共に、暦博士が来日している。・・・彼らは暦本・天文・地理書・
 さいやくし がくじん れき
 遁甲(一種の占星術)・方術書をたくさん持って来た。渡来系氏族出身の書生がこれらの知識を学¹⁸⁾んでいる。」¹⁹⁾



(紀元5世紀頃の朝鮮半島の国勢図)

その同時、大和王権の国家意識の形成も大陸文化の影響であったという。継体21年(527年)から22年にかけて、北九州の有力豪族、筑紫君磐井の乱は、王権に多大の衝撃を与えたが、それを鎮圧することで王権はより強固なものとなった。「さらに中国・朝鮮からの諸儀礼や思想を受け入れながら、国家意識が形成された。」²⁰⁾

そして、百濟から經由して一時的に中国文化の吸収・融合する運動が起きた。次の引用は少し詳しくこの運動を描いた。「百濟から倭国へ、各種の文物と共に、仏教・儒教・道教的信仰などが伝えられた。その百濟は、中国南朝の諸国家と密接な交渉を重ね、中国の文物や思想を受け入れていた。『宋書』百濟伝によると、450年(元嘉27年)に百濟王余毗は上表

えきりん しきせん ようど
 して、『易林』・式占・腰髻を求めたところ、宋の太祖(文帝)はこれらすべてをくれたとい

えきりん しきばん
 う。『易林』16巻は易の書であり、また、式占は式盤を用いて行うト占で、天文・暦法・

おんみょう
 陰陽・五行思想などと密接にかかわっている。百濟と南朝文化的交流はこれのみではな

い。『梁書』百濟伝によれば、541年(大同7年)、百濟は梁に使者を送って、涅槃經などの

きょうそ まうし
 経疎(経典とその注釈書)および医・工・画師・毛詩博士を求めたのに対し高祖はこれらすべてを与えている。²¹⁾ 6世紀に百済は倭国に上述の学問・宗教信仰・呪術などを伝えた。中国の文化を学んだ百済人たちは日本の古代文化の啓蒙・進化に対して大きな役割を果たしたと思う。

したがって、倭は直接かつ大量に高度な隋・唐文化の影響を受ける前、上述の朝鮮諸国の制度を摂取していたと考えられる。古代の朝鮮人も中国文明の強い影響を受けたはずである。「彼らは日本と同じように漢字を取り入れて中国仏教を摂取し、中国の統治技術を継受しながら国家を形成した。」²²⁾ 中国の隋(紀元 598~618 年)、特に唐(紀元 618~907 年)の時、倭国は数多くの遣隋使・唐使と留学生を送り出し、唐の文化や政治制度(中央集権統治)を必死に学びながら「日本」という独立の国を形成させたという。日本人は「唐の文化や政治制度を血肉と化して、日本的な国政や文化の原型を築いて行く。」²³⁾

中国の隋と唐の文化を融合するについて述べろうと思う。隋の大業 3 年(607 年=推古 15 年)遣隋使小野妹子は独立の国家としての日本を代表して国交の活動を行なった。妹子が隋皇帝 - 陽帝に献じた国書には、「日出ずるところの天子、書を日没するところの天子に致す、恙無きや云云」とあった。²⁴⁾ここに「日出ずる所」とあるのは、まさに「日の本」すなわち、「日本」と同じあり「日本」の国号の源流は推古朝にあったことが知られるであろう。

さらに、「推古朝の遣隋使はかつての倭の五王のように中国の皇帝から「倭王」に冊封(任命)されようとはせず、独立の国家として・・・中国と国交を開こうとしたのである。」²⁵⁾ この考え方をもちながら、倭国は 4 回程遣唐使を送り出したという。第一次遣唐使は 630 年(舒明 2 年)の時であった。当時、「日本」という国号はすでに神話に基づいて構想を図られた。唐の朝廷にこの国号を認めてもらうのは外交使節を送る大きな目的の一つであったという。「日本」という国号を公認させる交渉は大変だった。「確かに<倭>の字は「人に従うさま」、「背が曲がって低い」、「見にくい」というような意味の言葉であった。」²⁶⁾ 長い間、この東海の島々の人々はこの侮辱名呼び方に耐えて中国と交流していた。これは最初に述

べたように、日本人が先進国のことを学ぶために、とても謙虚だったと言えるであろう。

その2年後の632年に留学生・留学僧は帰国した。まず「僧旻が帰国し640年に

みなぶちのしょうあん かたむこのくるまる

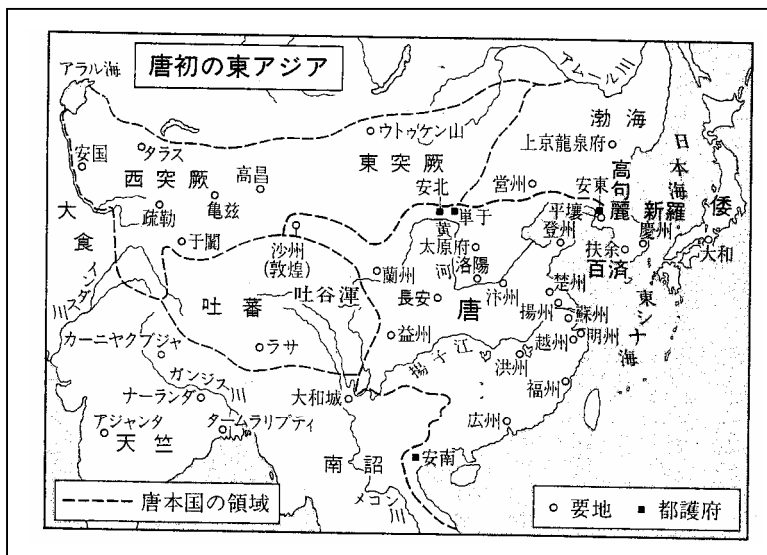
南淵請安、高向玄理も新羅經由で帰国した。旻法師は24年間、請安と玄理は32

年の長い期間にわたって中国に滞在していた。旻は帰国時に44歳前後、請安と玄理は52歳前後であり壮年時代のほとんどを中国で送ったことになる。」²⁷⁾ 彼らと留学生の影響で日本(7世紀後半頃から正式な国号)では643年に大化の改新が行われた。「改新政権は中央集権的な国制を模索しながら、さまざまな改革案を構想し、果敢に実行して行く。それは、世界の諸民族における未開から文明への転換、古代国家の形成の過程と共通する要素を持

っていた。」²⁸⁾ 孝徳天皇、中大兄皇子らは改革と新政権の指導者たちであった。改革の内容

は大體、唐の国制や律令に似ていた。重要な改革は例えば、「1. 645年~653年にかけて、旧来の国造の国を分割して新しい評(郡)を設置していた。2. 大化2年(646年)8月8日従

来の国制の骨格であった「部」の制度の改革(氏族制から官僚制へ)に着手した。3. 礼法を決めたり冠位制の改革をしたりした。」²⁹⁾



唐時代の国勢図 ³⁰⁾
 13年後653年(白雉4年)に第二次遣唐使が派遣された。「今回は新羅經由の北路と、東シナ海を直接渡る南路にわかれて出発したが、南路を取った船は出発後まもなく難破し、120人のうち生存者は

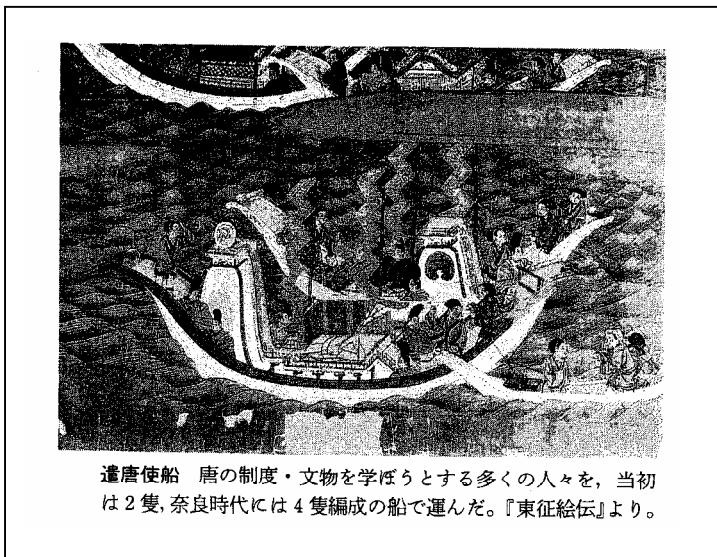
わずか5人であった。」³¹⁾ 優れた文化を学ぶために、日本人は巨大な代価を払ったとも言えるであろう。第二次遣唐使の第一船は、北路を取って無事に唐の都に辿りつき翌年651

年7月に帰国した。³²⁾

第三次遣唐使は第二次の代表が帰えて来た直後、654年7月ごろ出発したという。この「外交団の押使(首席)に抜擢されたのは国博士として改新政治を立案した高向玄理であり、

大使には河辺麻呂かわべのまろそして副使にはかつて新羅を経て唐から帰国し唐と国交を開くことを

朝廷に進言した薬師恵日くすしのえにちが任命された。朝廷が高向玄理と薬師恵日という唐や新羅につい



て深い理解を持つ人々を起用したことは、唐との交渉の重大さを深刻に受け止めていたことを示している。大使らは翌年(655年)8月、唐から帰国したが、押使の高向玄理は帰国せず、長年住みなれた中国にとどまり、ついに日本に帰らず唐に没した。」³³⁾

659年朝廷は第四次の遣

唐使を唐に送った。「難波なにわの

津を出発した二隻の遣唐使船のうち、第一船は逆風にあつて南海の島に漂着する。五人だけは島人の船を盗んで脱出に成功するが、残りは全員殺される。第二船は無事に中国の沿

岸、越洲の会稽県(現在の浙江³⁴⁾省興紹こうしょう らくよう うるう)に着き、洛陽で閏10月30日に高宗に謁見

する... 12月のはじめから遣唐使の団員が無実の罪で訴えられる事件などが起こるが... 遣唐使一行は、長安の一角に幽閉された。」³⁵⁾ 「朝鮮半島における二つの国家の戦争と唐と日本の介入のため、今回の留学生たちは30年もかかって全員帰国できるようになった。その後日本と中国の交流は商業方面にとどまった。」³⁶⁾

日中文化交流の中、「もっとも大事なポンド済は、実は漢字でありそれはあたかもヨーロッパ世界がローマ字で結ばれているようなものである。音標よりもむしろ表意の文字とし

て内外に広がった漢字、これで結ばれる東アジア文明圏は正しくは漢文文化圏というべきかもしれない。ともかく、ローマ字のように音標性や記号性に優れ、土着の文化を表現するのに適し、ゆえに中立で普遍性のある文字と違って漢字の特質は、文化の実質を伝えやすくしかも、芸術的であるという長所を持っている。・・・漢字=漢文文化圏の優等生は二つの国他、日本である。」³⁷⁾

遣唐使の派遣が停止された以後、日本と中国との間、長く正式的な国交が行われなかった。「たしかにこの時代、正式の外交関係は長く途絶の状態がつづいた。しかし、異なる民族と社会の相互関係、すなわち異文化間の交流は、人とモノとの複線的、複々線的な移動であって、いわゆる(外交)のみが、交流のすべてではない。・・・この時代の文物の交流は、かつての(政治)を第一義としたそれから、より(文化)と(経済)に重点をおいたそれに、大きく変化を見せるようになっていた。天台山・五台山など聖地への求法巡礼と仏教界の交流、宋における産業の発達をうけた民間貿易の活発化がこの時代の基調となった。」³⁸⁾「紀



釈迦像の模刻 釈迦の生国から伝来した梅檀(せんだん)香木の立像が、中国の工人によって模刻された。『釈迦堂縁起』

元 983 年日本の僧ちよう然^{ねん}はうまく中国に到着し宋皇帝(太宗)を謁見できた。彼は日本の国情などを報告し、失われた中国の国宝文献 - 『鄭氏注孝経』^{こうきょう}などを献上した。

39) 彼は中国人の親友となって中国の仏教界に親切に接待

されうまく巡礼を終えた。」³⁹⁾ちよう然は、中国の工人によって模刻された国宝、釈迦如来等身立像を中国の仏教界からのプレゼントとして日本に持って帰って来たという。」⁴⁰⁾「ちよう然の入宋は、これ以後の日中の社会的な交流に大きな懸橋(かけはし)を築き上げるものとなったと考えられる。1016 年ちよう然は世を去って享年 79 歳⁴¹⁾。しかし、かれの弟

子達、嘉因、寂照^{じゃくしょう}などは 1003 年と 1034 年に中国に行つて文物と宗教の交流をしてい



たという。

聖地 - 五台山⁴²⁾

10世紀から12世紀の中国の宋代は発明の世紀に当たった。「学術・芸術・文化の黄金期と呼ばれる宋代には、農業・交通・商業・都市・自然知識・化学の革命がいつせいに生じ、この水準が元(1271~1368)・明(1368~1644)・清(1616~1912)にかけての1000年の成長を支えた。占

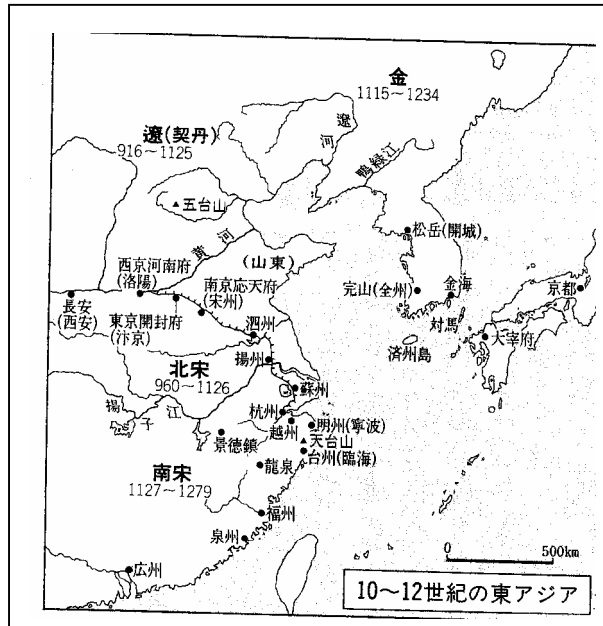
じょうとう

城 稲・稲麦二毛作、茶・蔗糖など商業作物、江南低湿地干拓と灌漑稲作、航海造船技術、

紙幣、約束手形、合資経営、都市統制の弛緩と商工ギルドの自立、倉庫問屋業の発達と保険業、都市市民文化の台頭、農村をブロック化する中小市場の林立、製陶・冶金の発達、印刷術と製紙の普及、朱子学・地理学・医学・博物学の革新、深遠な宇宙描写を目指す画風、そして地方社会の充実などなど、われわれが中国文明の精とが特色と考えているものは、ほぼ宋代に出揃い、またこの水準の質がのちに大きく破られたことはむしろ少ない。」

43)

この巨大な財富に基づいて宋代の商船はよく日本に来航したという。実は遣唐使の停止以後も中国商船の来航は、たえることがなくつづいたのである。「13世紀から日本人は中国の優れた造船・航法を覚え、百人余りを乗せる大船が年に40~50隻も中国の東南海岸に渡った。彼らは宋の『数学九章』という算術の本、胡椒、沈香、宋青磁、宋銅銭、納豆、秤、石硯、紙、絵、墨などなどを持ちこんだ。」⁴⁴⁾ 日中の貿易は1949年の新中国(共産党政権成立)までつづいたといわれている。貿易の収入は全体的に中国の方が圧倒的に大きかったという。そして、この貿易における不均等は欧米との間にも発生した。中国の過大の出超は近代における国際政治紛争の大きな原因となった。



10~12 世紀の東アジア ⁴⁵⁾

以上の史例によって中国における古代の絢爛多彩な文明は日本に大きな影響を与えたと思う。中国の古代文明は、日本がやや速く原始社会から封建社会 近代産業社会 現代工業大国に進化することに役割を果たしたに違いない。しかし、近代の日本は思想が開放し、謙虚に西洋のことを学んで実践したからこそ、大躍進ができた。現在、日本国は世界第二位の経済力を持っている。対照的に

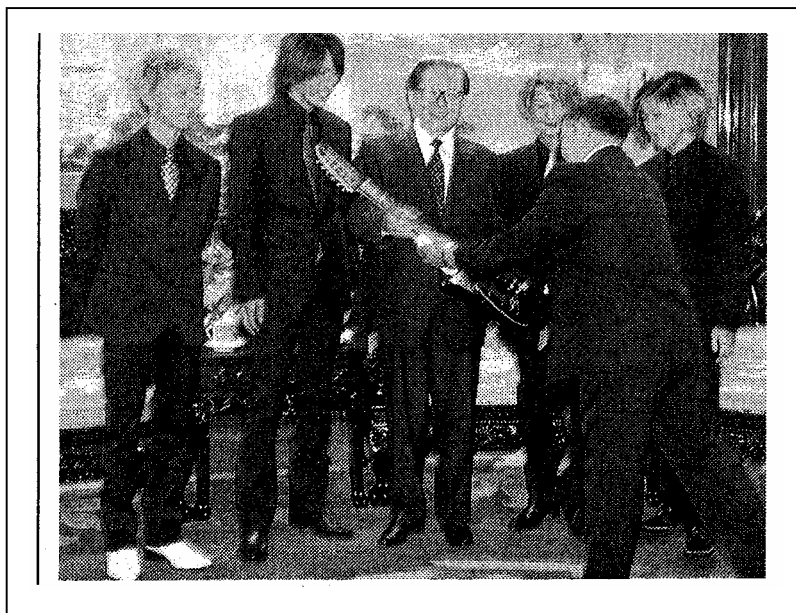
見ると、中国は 1980 年代まで「自己封鎖的、排外的思想」や「退嬰的孤立主義」という考え方を主流思想とした。今の中国は日本と比べれば、平均的に約 30 年もしくは 40 年の差で遅れていると思う。毛沢東が去世した後、鄧小平さんの「開放・改革」政策によって中国は今、自国の黄金期を迎えている。日本からのもの、経営管理術、資金・投資の吸収そして貿易によって、現在の日中関係は市場主導型であり、互惠互利の経済関係の発展が主流であると考えている。「日中双方とも輸出相手国としては二番目、日本の海外投資先として中国は第二で、78 年から 2000 年までの投資額は累計約 400 億ドルと対中 ODA を上回っている。これは両国産業の補完性によっている。日本の技術資源、中国の労働資源という補完性だ。」⁴⁶⁾

普通の人々は日中の交流が経済の分野ばかりだと思っているであろう。実は日中間の文化交流も昔から盛んできた。例えば、2002 年 6 月、「日本大学」大学院総合社会文化情報科主任教授 - 上田邦義先生は中国の広州に行って向こうの大学で「融合文化観」についてスピーチを行なった。評判は良かったので、翌年にも来て下さいと中国側に頼まれたそうである。そして、2002 年 9 月 10 日に「日本人が京劇」、「中国人が狂言」という伝統芸能の交換公演が行われた。中国と日本の若手役者が、日中国交正常化 30 周年の際、上海市で交換公演をして、日中の小中学生約 800 人が大きな拍手を寄せたという。この上海での交換公演について次の報道がある。「公演したのは、上海京劇院の看板役者で日本に留学中

の巖慶谷(32)と、外国人初の京劇プロである石山雄太(27)。巖と石山は中国戯曲学院に学んだ先輩と後輩。公演では、石山が新作京劇『時遷探路』を流暢な中国語で上海京劇院の役者とともに熱演。一方、巖は大蔵流の若手 - 茂山正邦とともに『盆山』をユーモラスに演じた。」⁴⁷⁾

同じ日に、日本の人気ロックグループ - GLAY のメンバー 4 人は、日中国交 30 周年記念コンサートの前に、江沢民国家主席を表敬訪問、会見したという。「ロックが反政府音楽として弾圧された歴史もある中国で、ロックミュージシャンが中南海で国家主席と公式会見するのは始めてだ。GLAY は 4 人とも黒のスーツに、いつもどおりの化粧と茶髪。これまでの中国の価値基準では「資本主義の墮落した文化」的ファッションだが、江主席は<スタイルがいいね>とほめ、<コンサートの大成功を祈ります>と破格の歓迎ぶり。リーダーの TAKURO がサイン入りのギターとニューアルバムを江主席に贈ると喜んだという。コンサートは 10 月 13 日北京の工人体育場で行われ四万人以上のファンを無料招待する。」

48)



メンバーから贈られたギターを手にする中国の江沢民国家主席(中央)

「ゆえに、また同じ日に中国の上海、北京、広州の三都市で公演を行う宝塚歌劇団が関西空港から出発した。メンバーらは 51 人がいり、中国の説話と日本の歌舞伎を基にした

『蝶恋(ディエ・リエン)』などを15回公演する予定であった。」⁴⁹⁾

したがって、「現在、在日の中国人留学生は4、5万人もいるという。彼らは遣唐使のような大きく自然的な危険を経験しなくても楽に来られる。実に幸せである。彼らの大多数は中国に帰って文化・経済の最前線に活躍しているという。」⁵⁰⁾

日本人の思想意識は中国の古典名作に影響されている。例えば、『三国志』は日本企業経営者たちの必読著作だという。この物語の人物と事件は彼らの処世哲学思想である。この下にある資料は日本の経済達人たちの『三国志』に対する感想の一部である(出典 - 産経新聞⁵¹⁾)。

'02 三国志に夢馳せた英傑たち

『三国志』は人間学の宝庫である。「我れが天に背こうと天が我れに背くを許さじ」と気概を示した乱世の奸曹操。漢再興の大義を掲げ、人徳で惹きつけた劉備。年齢、門閥にとらわれず人材を抜擢し魏と蜀に伍した孫三人の英傑には人が随いていきたくなる魅力があった。桃園の契りの関羽、張飛、水魚の交わりの孔明。曹操心酔した張遼、夏侯惇、典韋。孫権なればこそ大將軍となった呂蒙、陸遜、魯爾。それぞれ「君、臣を扱ひのみにあらず、臣もまた君を扱ひ」だけの豪勇なり、智謀を備えた器量人だった。時代が人を創るのか、人が時代を創るのか。三国志の乱世は人を鍛え、人を出会わせ、人を成長させる道場だったのかも知れない。

バブルの崩壊から既に13年、21世紀へと世紀を^{また}踏み越えても長いトンネルはまだその出口を見せない。アメリカの同時テロ、不正経理の発覚、日本でも相次ぐ大企業の破綻、不祥事、底なしの株安…。企業経営者にとって、今はまさに明日をも知れぬ乱世だ。乱世とは永く続いてきた秩序や常識が取り壊され、新しい概念や技術が生まれる“踊り場”を指すのかも知れない。紀元2世紀末から約1世紀、三国志の時代もまさしく乱世であり、時代の踊り場だった。時代に人が育てられ、人が時代をたくり寄せ、三国志は魅力あるリーダーと人材を輩出している。幾多の難局と遭遇しながら彼らはどのようにして自らを叱咤し、部下を励まし乱世を乗りきったのか。天空を越えて曹操に劉備に孫権に学んでみたい。企業の志魂特別版'02秋。

日本の伝統芸術、「能」の素晴らしい芸術個性と内在の思想も中国の人々に知らせた方が彼らにとって有益だと思う。“Noh Shakespeare”の役者 - 上田邦義先生の活躍を期待している。ぜひ、また広州に行って文化交流をなさってください。数多くの異文化を経験でき、しかも数カ国語ができることに恵まれた私は、この論文を書いていた際、胸がいっぱいになって無感量であった。私も先輩達のように日中友好の懸橋になりたいと思う。現在、日中の近代文化は、古代のようにもっと融合し合えば、するほど、友好のきずなが強くなるであろう。

結論として、日本人という民族は古代から近代までにとっても謙虚に外国の優れた文化・技術を融合したりするから、経済大国になったと思う。融合するというプロセスはまず学ぶことで、そして吸収して運用することである。勿論、努力と行動力も重要である。近年、日本人の外国に対する文化と技術を学ぶ態度と方法は、たくさんの国々により研究されて

いる。日本人のやり方をよくまねをしている優等生は、中国人である。だからこそ、彼らは急成長している。

赫々たる経済成果を上げた日本人は、もしここまでの発展に満足とすれば、とても不十分だと思う。現在、一部の日本人の精神意識は欧米人と比べて、ずいぶん遅れていると思う。例えば、社会福祉の不健全さ、同性愛者に対する反感態度、キリスト教とイスラム教に対する不信感、国土そして世界の環境破壊に無視、個人利益至上主義の氾濫は、その不十分なところである。これらに対する違う考え方を持つ人に支援する、なおかつこれらと異なる文化思想を調和して行くのは、おそらく日本人にとって 21 世紀の課題かもしれない。

注

- 1) 石ノ森章太郎『マンガ日本の歴史 第1冊』中央公論社，1989，236頁。
- 2) 同 32-83頁。
- 3) 同 166頁。
- 4) 同 169頁。
- 5) 同 174-5頁。
- 6) 同 216頁。
- 7) 石ノ森章太郎『マンガ日本の歴史 第2冊』中央公論社，1989，18頁。
- 8) 同 104頁。
- 10) 同 119頁。
- 11) 同 223頁。
- 12) 同 218頁。
- 13) 同 234頁。
- 14) 石ノ森章太郎『マンガ日本の歴史 第3冊』中央公論社，1989，212頁。
- 15) 同 212頁。
- 16) 棚橋光男『大系日本の歴史 古墳の時代 第2冊』小学館，1988，76頁。
- 17) 同 133頁。
- 19) 同 166頁。
- 18) 同 133頁。

-
- 20) 同 271 頁。
 - 21) 同 296-7 頁。
 - 22) 棚橋光男『大系日本の歴史 古代国家の歩み 第3冊』小学館, 1988, 151 頁。
 - 23) 同 16 頁。
 - 24) 同 11 頁。
 - 25) 同 13 頁。
 - 26) 同 10 頁。
 - 27) 同 25 頁。
 - 28) 同 35 頁。
 - 29) 同 36-49 頁。
 - 30) 同 25 頁。
 - 31) 同 62 頁。
 - 32) 同 63 頁。
 - 33) 同 13 頁。
 - 34) 棚橋光男『大系日本の歴史 王朝の社会 第4冊』小学館, 1988, 13 頁。
 - 35) 同 63-4 頁。
 - 36) 同 78-9 頁。
 - 37) 田中健夫『海外視点・日本の歴史 鎌倉幕府との蒙古襲来』ぎょうせい, 1986, 34-5 頁。
 - 38) 棚橋光男『大系日本の歴史 王朝の社会 第4冊』小学館, 1988, 146-7 頁。
 - 39) 同 149 頁。
 - 40) 同 151 頁。
 - 41) 同 152 頁。
 - 42) 同 150 頁。
 - 43) 田中健夫『海外視点・日本の歴史 鎌倉幕府との蒙古襲来』ぎょうせい, 1986, 38 頁。
 - 44) 同 127 頁。
 - 45) 棚橋光男『大系日本の歴史 王朝の社会 第4冊』小学館, 1988, 146 頁。
 - 46) 伊藤正「日本との関係」『産経新聞』2002年9月26日, 特集12版, 第7面。
 - 47) 『産経新聞』2002年9月11日, 芸能14版, 第28面, 「伝統芸能を交換公演」。
 - 48) 同第28面, 「GLAYを熱烈観迎江主席・・・」。
 - 49) 同第28面, 「宝塚のメンバー記念公演・・・」。
 - 50) 宋方聞さん, 中国深 zhen 健安医薬株式会社, 華南四省地区本部長。
 - 51) 『産経新聞』2002年9月12日, 全面広告12版, 第22面, 「企業の志魂」。

参考文献

- 石ノ森章太郎『マンガ日本の歴史 第1冊』中央公論社, 1989。
石ノ森章太郎『マンガ日本の歴史 第2冊』中央公論社, 1989。
石ノ森章太郎『マンガ日本の歴史 第3冊』中央公論社, 1989。
伊藤正「日本との関係」『産経新聞』2002年9月26日。
『産経新聞』2002年9月11日, 芸能14版, 第28面。
『産経新聞』2002年9月12日, 全面広告12版, 第22面。
田中健夫『海外視点・日本の歴史 鎌倉幕府との蒙古襲来』ぎょうせい。
棚橋光男『大系日本の歴史 古代国家の歩み 第3冊』小学館, 1988。
棚橋光男『大系日本の歴史 王朝の社会 第4冊』小学館, 1988。

